

中学生の前で国語の授業を行うのは、16年ぶりだった。果たして、できるのか。少しばかりの不安と大きな期待を胸に教壇に立つこととなった。

当日は、Y中学校のK先生とH先生が、ビデオカメラを持って参観に来てくれた。担任の先生の話だと、ゲストティーチャーとしか言っていないとのことだった。そうであるならばと、一興を講じることにした。「H先生、せっかく来てくれたのだから、授業の初めに生徒の前に立って、授業開始の挨拶までやって。そしたら、すぐに私が登場してチェンジするから」

ここまで打合せをして、教室へと向かった。すると、黒板の前にすでに生徒指導主事、保健体育担当のS先生がいるではないか。どうやら、S先生も一興を考えてくれていたようだった。「H先生、ごめん。出番がなくなった」

S先生の見事な演出により、私の登場となった。本校の先生方も来てくださった。事務のSさんの姿もあった。娘さんが、4月より教壇に立つことになっている。皆さんには、事前に授業の流れとポイントを書いた授業構想をメールで送信しておいた。問題は、授業者である自分が、その構想を頭に入れているかである。

授業が始まった。自分でも、16年ぶりとは思えなかった。身体が、覚えているのだろうか。あるいは、この16年の間に、たくさんの授業を見てきたからだろうか。思えば、授業のイメージトレーニングだけは積んできたのかもしれない。

授業は予定通りに進んだ。内容は、中学1年生の古典、それも漢文の『矛盾』の話である。私がコーディネートをし、生徒からどんどん意見が出てくるという授業ではなかった。授業をしながら、そのときの判断で、授業シナリオを変更した場面が2回あった。だが、授業の流れとしては変えてはいない。

生徒のことがわからないままに授業をやっているというのもあるが、「故事」や「故事成語」という新しい知識は、生徒にとっては、簡単ではないことがよくわかった。教科書には書いてあるのだが、容易には理解できないようである。こちらの説明力を必要とする。

参観者に一番見てほしかったのは導入と机間指導である。コンパクトな導入と“魔法の赤ペン”を使った個別指導である。忙しく生徒のノートを見ていったが、一人の女子生徒が書けずにいた。アドバイスをし、しばらくしてからまた行ってみると、さほど進んではいなかった。

この時間の授業構想は、本校が目指している「一人も取り残さない」授業システムに基づくものである。確かに、授業の最初から最後まで、全員の生徒が集中して取り組んでいた。だが、メインの学習活動でつまずいた生徒を時間内に救うことができなかった。このことがずっと残ってしまった。あのとき、どうすればよかったのか。授業は、やはりむずかしい。